

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名 GEGEN Saren
学位 博士(教育学)
学位記番号 新大院博(教)第19号
学位授与の日付 平成28年3月23日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
博士論文名 内モンゴル自治区における美術教育の問題点と地域性を生かした美術教育の検討

論文審査委員 主査 佐藤 哲夫 教授
副査 柳沼 宏寿 教授
副査 伊野 義博 教授

博士論文の要旨

本論文は、内モンゴルにおける美術教育の現状と課題を明らかにし、子どもの主体的な自己表現活動の成立を模索するための方策として、子どもの生活の拠点である地域と美術教育の間に有機的な関連を付けることによって、美術教育の活性化を図ろうとするものである。

論文を概括すると、まず、背景となる内モンゴルの地域の現状、学校教育などの諸概念及び歴史的な発展経過を検討対象としている。また、文献調査によって分析視点を定義し、実践授業の理論的な構築を行っている。これらを踏まえた上で、小学校の美術教育と教員養成を行っている大学の美術学部における現地調査を通じて、内モンゴルの美術教育の現状と課題を明らかにした。最後に地域性を生かした授業実践を分析し、考察をまとめた。

序論は3つの部分で構成されている。第1の部分では、本研究の課題を提示し本論文の範囲を提示している。研究課題は、美術教育の立場から、内モンゴルにおいて知識や技能を重視する教育観から脱却し、子どもの存在(子どもの興味、関心)を重視し、子どもが主体的に自己表現できる授業構成を探究することにある。本論文では、内モンゴルにおける美術教育の現状と課題を明らかにし、子どもの主体的な自己表現活動の成立を模索するための一方策として、子どもの生活の拠点である地域と美術教育に有機的な関連を付けることによって、美術教育の活性化を図ろうとした。第2の部分では、研究背景と意義について論じた。内モンゴルの急激な経済発展及び社会変化による子どもの生活経験の希薄化と教育をめぐる人間的発達の歪み、知識や技能を重視する教育観による子どもの生活実態から乖離した教育内容の問題に対し、内モンゴルの美術教育の根本的な問題点を明らかにすることは、内モンゴルの知識や技能を重視する教育観から脱却し、徳育、知育、体育、美育、労働のバランスのとれた「素質教育」へと歩もうとしている中国の教育方針の実行の基礎的な資料として利用できる。現代の社会環境の中で成長し、一人の人間として生きる子どもの心身の成長過程を豊かにするため、子どもの生活実態に基づいた地域性を生かした美術教育の理論的な構築及び授業実践の研究には意義があ

る。第3の部分は、研究方法・論文の構成の説明である。

第1章では、ゲリチル地域を事例として、内モンゴルの地理的位置づけ、当地域の過去、現在及び歴史、伝統を検討し、現在の子どもの実態と美術教育の変化を探った。内モンゴル自治区は、昔からモンゴル民族を中心とした地域であり、遊牧民族の千年の歴史を作ってきた。長い歴史の中で民族の特色を色濃く持つ家庭教育を形成してきたのである。しかし、1949年より中国政府に属し、国の政策、経済発展に伴った急激な人口増加によって、生活方式が変化して来ている。それにより子どもの生活環境や自然環境、社会環境、家庭教育、また学校教育も大幅に変容しつつある。一方では、ゲリチル地域のモンゴル民族が数千年も続けてきた遊牧文化、伝統的な生活習慣はまだ根強く残されている。また、内モンゴルでは、中国が成立して以降（1949年）が最初の美術教育の大綱化であり、学校教育の現場に対して、直接的な指導を及ぼすことになったと言われている。現在では、素質教育を通して、創造性や個性の育成、問題解決学習に重点が置かれ、美術を通しての教育が進められるようになってきている。

第2章は、本論文の全体を繋げる理論的な構築である。本研究の理論的な視点となる美術教育の意義と特質を明らかにし、地域性を生かした授業実践の理論的な基盤を論究した。さらに、本研究で行う今日の内モンゴルの美術教育の現状分析を提示して、地域性を生かした美術教育の実践授業の理論構築及び考察の視点を明示した。

美術教育は、子どもの主体的な自己表現活動を通して、子どもの生まれつきの創造力を伸長し、子どもの感情を健康に育み、人格を陶冶させる教育である。さらに、子どもが主体となる造形表現としてのものづくり教育は、現代社会に生きる子どもの五感を発達させ、感性を培う活動であり、心身のバランスを取り戻す教育である。ものの見方、感じ方を転換し、感情を働かせ、人間の感性を涵養する教育である。また、地域性を生かした授業の構成は、子どもの興味・関心を引き出す近道であり、生活を基盤とした学習は、物事の本質を理解できる知性に通じる道である。

第3章では、今日の内モンゴルにおける美術教育の教育理念、教科書内容を日本の図画工作の方針、教科書内容と比較検討しながら、その問題点を明らかにした。美術教育の理念では、知識や技能を重視する教育観から脱却し、子どもの総合的な能力、問題解決する能力、創造精神、学習能力、実践能力を養うことを重視しているが、内モンゴルで用いられている教科書では、技術を重視する旧来の技術教育の影響が見え、子どもの生活実態から離れている内容が設定されている。

第4章では、内モンゴル自治区における教員養成システムの美術学部の構成と特徴、大学生の学習内容を考察し、大学生の卒業制作作品の題材と教育実習の状況について分析した。その結果、大学教員スタッフ及び現場の教員は、美術の知識や技術教育を重視した教育観をもっている教員が多く、教育実習の期間が集中しているため、学生たちは子どもたちと触れ合う機会がなく、子どもたちの状況を十分理解できずに卒業している問題が明らかになった。

第5章では、本論文の視点及び理論を検証するため、子どもが主体的に自己表現できる活動、能動的な探求及び創造力の発達に関わる活動、想像力の開発できる活動の視点を求めて行

った三つの実践授業に関する分析を行った。

実践授業を通して、現在の内モンゴルの美術教育の問題に対し、子どもの自己表現活動のために、造形表現としてのものづくり活動の導入は重要な役割を果たすことが分かった。そして、地域の材料、諸仕事、文化、地域社会に目を向け、それらを生かして美術教育の題材として取り入れることは、現代社会の中で生きる子どもたちの探究能力、創造能力の発達、成長にとって大きな意義と必要性を有することを論じた。

結論では、それまでの各章にわたる考察を踏まえ、本研究の全体を通して得られた事を要約し、今後に残された課題について述べた。

審査結果の要旨

本論文は、中華人民共和国の五つある自治区の一つである内モンゴル自治区を対象に、その地域における美術教育の現状を調査しその問題点を探り、これから望まれる美術教育の在り方を提示している。調査は、現地調査を中心に直接観察、収集資料分析など様々な角度からの調査を含んでいる。例えば、現地の小学校に於ける美術教育の現状調査は当然としても当地での子どもの生活実態や教員養成を行っている大学の調査等も含んでいる。この大学調査では、教員養成カリキュラムのみならず、大学で用いられているテキストの中身やそれを支えている理念も検討し、更に、それぞれ担当の異なる教授達の教育の傾向性、学生の美術制作の種類や主題の分布なども調査している。そして、大学4年次に設定されている教育実習について実際の事例を提示し踏み込んで詳しく調査している。また、日中（内モンゴル）の美術（図工）教科書の比較も行っている。こうした広範な調査を行ったことで、内モンゴルにおける小学校の美術教育の問題点を、単に現象のレベルでの評価で終わらせるのではなく、個々の問題現象の原因となっている諸要素の複合した在り方を浮かび上がらせることが出来た。この点は、本論文の最も優れた点であると思われる。本論文の扱っている美術教育を巡る問題は、中国と日本、北京と内モンゴル、内モンゴルと日本の比較と三項の絡まりに対する意識を背景に持っていることで現実性と具体性を帯びたものになる。

一方、地域性を生かしたこれからの内モンゴル美術教育については、提案されたものは、現在はまだ実証されたものになっているとまでは言い難い面がある。審査において指摘されたことの一つは、提案された実践授業が、検討されてきた問題の解決策たり得るものであることの明証が不明確ではないかという事であった。効果の臨床試験のようなものは時間的に困難である以上、授業の実施によるミクロな変化を客観的かつ正確に記述評価することで蓋然性を高めるしかないと思われるが、そこが若干不十分であるとは言える。しかしながら、分析と構想だけに止まらず、自ら新しい地域的な内容と方法を含む授業を三つ構想提案し現地の小学校で実際に試行したことは、実際に役立つ意図と動機を含むものであるはずの本研究テーマに照らして重要なものとして評価される。

なお、本論文は小学校の教育活動を研究対象とし、また、小学校における教育内容の研究と

実践を主要な要素としており、教育学的な観点からの考察が中心であることから、博士(教育学)が適当であるとされた。

以上により、本論文は、博士(教育学)の学位を授与するに値するものと判断した。